イギリスのインド支配と日本の今

2017.03.21 Tuesday
さて今、目黒駅界隈には、アマゾンの本社が移転してきて賑やかになり、インド人らしい人々とはよくすれ違う。彼達は英語を話すので、海外で雇用され易い。それはフィリピン人達と同じだが、IT 産業に多い。IT 産業はカーストと言うインド伝統の過酷な身分制度、その世襲的な職業指定の無い、全く新しい職だから、とも言う。

①　プラッシーの戦い　　2012.06.10 Sunday
インドの国は、17 世紀には英国の東インド会社（実際は要塞で現地有力者と交渉、戦闘もした）を設立されて、仏との権益争奪戦（カーナテック戦争（1744 年 - 1763 年）の後、英国の東インド会社がムガール帝国から徴税権を握っての植民地支配となった。

この英仏戦争の終盤が、1757 年のプラッシーの戦い。英国側に買収されたインド人の将校が自国ベンガルの太守の命令を無視して出撃せず、これが原因で英国が勝利した。買収した側のクライブ成る人物は英国で当時英雄になったそうだ。そしてクライブ将校側の傀儡政権を立てて、結局ベンガル地方の徴税権を獲得してしまうのだから。今の日本の野田総理らの面々、日本の現状、未来と重なる。

この戦争では戦う兵士もインド人がほとんど、フランス軍 6800 人の内白人は僅か 50 人。インド社会はカースト社会、カーストの上位クラスのみをイギリス東インド会社が雇い、カースト制度を利用し、また宗教上の対立も利用してインド人同士を戦わせている。支配者イギリスと戦うのではなく、インド人同士が英国の利益、インド人の悲惨の為に戦った。

そしてインド人達には、その前のベンガル太守の時代の数倍の税を徴収し、税を増やすだけでなく、インド農民に高く売れる商品作物の栽培を強制し、綿布の染料に使う藍や、麻薬アヘンの原料となるケシなどしか作らせない。小麦など食糧をつくるべき畑で、食糧を作れず、藍やケシをいくら栽培しても、腹の足しにはならず、この結果、飢饉が激増する。

この後インドでは大飢饉が連発、100 年の間に 20 数回、2200 万人以上が餓死している。インド社会はイギリス支配によって貧困化して行った事が分かる。

②　デカン高原の肥沃な大地
ＴＰＰ以後の日本農業は、国際市場での利益優先の農業へと向うのであろうか。しかし今回、中国では日本農産物の福島原発事故の放射能を危惧した排斥も起こっている。世界中でこの傾向へと動くのではないだろうか。

国内では、マスコミ総動員、政府主導で農産物の放射能リスクは、風評だと言う事にしているが、人類が初めて経験する規模の放射能事故であり、その影響は不明。時間経過とともに何が明らかになるのかは不明というべきであろう。

風評か否か？日本の農産物が世界市場を席捲する事は、想定しにくいのではないだろうか。東京のスーパーでも、関西勢産品が高価、関東勢は安価でも売れ残る。海外では関西も関東も見分けがつかないであろうから。

日本の農業はさらに国内向け、労働力投下型の、日本的農業スタイルにシフトして、サステイナブルな農業ではないのか。ＴＰＰやアメリカ主導の農業では、国民の食料調達、自給も程遠く、儲けも薄く、破綻への道ではないだろうか。

インドの肥沃な大地は、綿花などの先進国、宗主国向けの産品だけとなり、土地は荒れて農村社会は荒廃したと言う。日本の伝統的な農業のスタイルは、里山、水田耕作といった生物多様性を維持する、サステイナブルな農業スタイルである。

③　セポイの反乱――インドの大反乱
英国の植民地支配の下で、東インド会社に雇われていたインド人の兵士達、セポイ軍、あるいは「シパーヒー」が、プラッシーの戦いからちょうど 100 年目、1857 年になって大反乱を起こす。

東インド会社が現地から傭兵を調達するようになった始まりは、1757 年のプラッシーの戦いの時、これらの傭兵が「シパーヒー」で、日本ではセポイという表記が一般的だった。彼らは上層カーストに位置するヒンドゥー教徒と上流階級のイスラーム教徒で構成され、規律正しく、有能。次第に重く用いられるようになり、19 世紀には東インド会社の兵力の中心、反乱当時は 20 万のシパーヒーが存在したとされる。

彼らが反乱を起こした直接的な原因は、イギリス本国で新たに採用されたライフル銃（それまでの滑腔銃と異なり正確な命中精度と強力な威力を持つ）である P1853 エンフィールド銃の薬包（先込め銃に装填する一発分の火薬と弾丸をセットで紙包みで包んだもの）に、ヒンドゥー教徒が神聖視する牛の脂とイスラーム教徒が不浄とみなしている豚の脂が使われており、この銃がシパーヒーにも配備されるという噂が流れたことである、と。（ウィキペディア）

④　チャパーティーと予言（http://www.y-history.net/appendix/wh1302-053.html）

シパーヒーの反乱が始まる前に、不思議な現象が起こった。北インドで主食とされている小麦粉を薄く焼いた“おやき”のようなチャパーティーが、村から村へ配られていったのである。それを配って歩いたのは各村の村番たちである。不思議に思ったイギリス人が訳をたずねても、彼らは何も答えない。そして反乱はチャパーティーが配られた村々に広がっていった。

またそのころ、街や村で預言者が異口同音に「1757 年、プラッシーの闘いでイギリスはインドに覇権を確立した。あれからちょうど百年、百年目の今こそイギリスは滅び、イギリス人は皆、海に追いやられて死ぬ！」と予言した。＜長崎暢子『インド大反乱一八五七年』1981 中公新書 p.5-7＞

シパーヒーの蜂起はインド全体の大反乱のきっかけとなり、各地で民衆が反乱に加わった。シパーヒーを中心とした反乱軍は、デリーに進軍、ムガル帝国の皇帝バハードゥル＝シャー２世を擁立して、デリーに政権をうち立てた。また反乱軍には、イギリスのとりつぶし政策に反発した藩王国も加わった。インド西部の小国の女王ラクシュミー＝バーイーもその例であり、彼女は反乱軍の先頭に立って闘い、インドのジャンヌ＝ダルクと言われた。こうして反乱は全インドに拡がり、各地に反乱政権が生まれた、と。（戦闘の拡大）

イギリスのインド総督カニングはボンベイ、マドラスの両管区から兵を召集、前年に反乱が終結していたイラン、太平天国の乱が下火になっていた中国から軍隊を移動させた。さらに、ネパールのグルカ兵（かつてグルカ戦争でイギリスと戦ったが鎮圧された)、パンジャーブのシク教徒（かつてシク戦争でイギリスと戦ったが、一方でイスラーム教徒と根深い対立関係にあった）を味方にし、近代的装備にものを言わせて反撃に移った。（イギリスの反撃）

反乱軍とイギリス東インド会社軍の戦闘は、９月まで続いたが、東インド会社軍が態勢を整えたのに対し、反乱軍は横の連携もとれず、内部対立が生じ、またヒンドゥーとムスリムとの対立もあってまとまらず、デリーが陥落し、反乱は鎮圧され皇帝バハードゥル＝シャー２世は逃亡したが、捕らえられてビルマに流刑になった。これによって、ムガル帝国は名実ともに滅亡し、デリーは陥落、各地の農民反乱はさらに１年以上にわたって続き、1859 年１月に鎮圧される。（終結）

⑤　残虐な処刑が待っていた

反乱軍の捕虜には、ほとんど裁判もなく死刑が宣告された。処刑の方法は、数人ずつ束ねて大砲の前に立たせ、弾丸もろとも吹っ飛ばすとか、マンゴーの木の下に荷車を置き、その上に何人かの罪人を立たせて枝から吊したロープに首を巻き、牛に車をひかせるとか、象を使って八つ裂きにするとかいろいろと‘趣向’がこらされた。

アラーハーバード近郊の街路に沿うて、樹という樹に死体が吊され、‘絞首台に早変わりしなかった樹は一本もなかった’ほどであった。それからヒンドゥー教徒の口に牛の血を、ムスリムの口に豚の血を流し込んで苦しめたり、・・・。また、反乱者を出したり、かくまったりした村や町には、四方から火が放たれ、火をくぐって逃げ出して来るものを、老若男女を問わず、待ちかまえていて狙い撃ちするといった手のこんだ演出までしでかした。

これらの行為は、イギリスの軍人自身が‘誇らしげに’伝えた証言にもとづく事実である。＜森本達雄『インド独立史』1978 中公新書 p.47-78＞　ベトナム戦争やイラク戦争の原型がここに見られる、と。

⑥　インドの完全植民地化と世界

反乱の鎮圧に成功した英国は、それまでの東インド会社を通しての統治には限界があることを認識、ついに 1858 年に東インド会社を解散させ、インド総督を頂点とした本国から派遣した官僚・軍隊による直接統治に切り換えた。そして 1877 年（明治 10 年）にはヴィクトリア女王を皇帝とするインド帝国を樹立し、イギリス帝国主義の最大の基盤として、植民地支配を続ける事になる。

インド大反乱が起こった 1857 年は、ヨーロッパではクリミア戦争（1853〜56 年）の終わった翌年、中国では太平天国の乱（1851〜64 年）、アロー戦争（第二次アヘン戦争・1856〜60 年）の最中、日本の開国（1858 年、日米修好通商条約）のころである。

これら明治維新に先行するアジアの反植民地闘争を体験した欧米列強が、日本に対しては民族抑圧的な武力行使には出ずに、自由貿易の強要という外交交渉を優先させたともいう。

そしてケンブリッジ大学の歴史学者、Angus Maddison の推計によると、インドの世界経済の所得におけるシェアは 1700 年代の 22.6%から 1952 年の 3.8%にまで低下してしまった。（ウィキペディア）植民地経営によるインド経済の疲弊と言うべきであろう。

⑦　インドの独立――カースト社会の温存と宗教抗争

1877 年にインドはヴィクトリア女王を頂く帝国となって、第一次大戦（1914 年）勃発までの 40 年近く、反英感情の高まりの中でも、インド植民地では、おおかたは積極的にイギリスのドイツとの戦争を支援し、多数の兵士が徴兵に応じてイギリス軍に参加した。インド担当相のモンタギューは、1917 年に大戦後のインドの自治を約束する宣言を出した。

しかし人類史上初めての総力戦（第一次大戦）は長期化し、やがて植民地でも反英独立運動

が活発となって、英国の統制は弱まり、19 世紀からの「大英帝国」の繁栄は終りに向かいつつあった。そして途中から第一次世界大戦に参加したアメリカ合衆国が、戦後に債務国から債権国へと、世界の強国にのし上がっている。

ここで第一次世界大戦後の自治の約束は実現せず、国民会議派のガンジーを中心とした独立運動が展開するが、この時インド国内では、ヒンズー教とイスラム教の対立、カースト制度による国民の分断を抱えており、やがて第二次大戦をむかえる。

第二次世界大戦が起こると、イギリスはインドを自動的に連合国側に参戦させ兵力の供給地とするために、大戦後の独立を認めた。しかし国民会議派は、帝国主義との戦いよりも、まず即時独立を認めよと迫り、即時独立を認めないならば、イギリスには協力できないとして、「インドを立ち去れ」（クィット＝インディア）運動を起こした。イギリスはガンジーらを逮捕し、運動を弾圧した。

そして戦後の 1947 年 7 月、アトリー内閣（労働党）のもとで、イギリス議会がインド独立法を可決する。ナチスドイツ敗北後のイギリス 1945 年 7 月 5 日の総選挙では、戦争を勝利に導いたチャーチルの名声に依存した保守党に対し、戦後再建にむけて大規模な社会改造を掲げたアトリーの率いる労働党が挑戦し、労働党３９３議席、保守党２１３議席（自由党はわずか１２議席）という大勝利を占めた。戦争に飽いた国民が社会保障の充実などの労働党の政策に大きな期待をかけた結果といえる、と。

アトリー内閣はイギリス最初の労働党単独の内閣、国民の期待に応えて、社会保障制度の充実、（ゆりかごからは墓場まで）の「福祉国家」を実現した。マルクス主義的な暴力革命によらずに社会改良を行おうという社会民主主義の思想、また経済理論としては財政支出によって完全雇用をめざすというケインズの限界がまだ見えない頃であった。

しかしこの政権下でも、1947 年 8 月 15 日のインドの独立は、独立運動の指導者ガンジーの思いに反して、ヒンドゥー教徒の国であるインド連邦とイスラーム教徒の国であるパキスタン（インドの東西の二地域、現在のパキスタンとバングラデシュから成り立っていた）へと、インドは二つの国へと分離独立となった。

⑧　独立後のインド

独立の直後から、宗教対立は深刻であり、カシミールの帰属問題、インド＝パキスタン戦争へと続いていった。初代首相にはジャワハルラール・ネルーが就任し、政教分離の世俗主義という柱で国の統一を図り、1950 年に共和制へ移行。1946 年 12 月発足の制憲議会が 1949 年 11 月 26 日にインド憲法を公布、それを受けて 1950 年 1 月 26 日に施行された。

この憲法の起草者アンベードカルは、カースト制度下の不可蝕民出身であり、憲法上にカーストによる差別は否定され、前文では、インド国民が主権を持つ民主共和国を実現する決意を明らかにし、公民すべてが社会的・経済的・政治的な正義、思想・表現・信条・信仰・崇拝の自由、地位・機会の平等を確保し、個人の尊厳と国家の統一をもたらす友愛を促進することを規定している。

しかしながら、現実のインド社会では、カースト制度の下での女性蔑視、不可触民（ふかしょくみん）への過酷な蔑視、問題が引き続くと言う、憲法規定と実態の乖離は、日本の実態との重なるのではないだろうか。平和憲法下での自衛隊、証拠なき有罪判決、代用監獄による長期拘留の日本の現状である。

ネルーは 5 か年計画による重工業化を推進し、対外的には冷戦下にあっても両陣営に属さない非同盟の立場をとった。冷戦時代のインドは、アメリカ型政治体制にも共産党体制も採らない、中立非同盟諸国家の中心となった。

1964 年にネルーが死去、国民会議派のラール・バハードゥル・シャーストリーの短期政権を経て、1966 年にはネルーの娘インディラ・ガンディーが長期政権を担ったが、1980 年、返り咲いたインディラ・ガンディーは 1984 年暗殺されており、後継したインディラの息子ラジーヴ・ガンディーも辞職後に暗殺されている。

その後もインドは、基本的には中立非同盟を維持しつつ、BRICS（ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカ）と言う新興国の 1 つに数えられて注目を集めているが、植民地支配の負の遺産と言うべき、宗教対立、そしてカースト制度の中で、貧困率も高く経過している。

⑨　カースト制度
（インドで生まれた独特の社会的身分制度 「ヴァルナ」「ジャーティ」と呼ばれる。）
「ヴァルナとはサンスクリット語で色を表し、肌の色による差別体系のことを指します。もともとは白色系人種であるアーリア人がインド西北部に侵攻してきた 際にインドの先住民族であるドラヴィダ族等の有色人種と自らを区別するために作り上げた制度です。」とある。

「司祭階級の「バラモン」を頂点として、その下に王族、武 士階級の「クシャトリア」、農民や商人等の庶民階級である「バイシャ」、奴隷階級の「シュードラ」の 4 階級に区別されています。さらにその下に「不可触民」が置かれており、アンタッチャブルとかハリジャン、当事者は自分たちをダリット(दलित)と呼ぶのを好んだという。ダリット(दलित)とは「困窮し

た者」「押しつぶされた者」「抑圧されている者」の意。牛糞にまみれた不可触民、飲水、食物すら拒否されるという。

尚、ガンジーは、この不可触民の呼称についてハリジャン（神の子、हरिजन）として、差別撤廃の必要を説いている。しかしこの呼称はガンジーがヒンドゥー教の輪廻転生の教義にしたがい、現世で苦しんでいる彼らは来世で必ず良い生まれ変わりを迎えるだろうとして恩恵的、偽善的に呼んだにすぎず、この呼称によってむしろ、カースト・ヒンドゥー（不可触民以外の一般のヒンドゥー教徒）社会全体が良心に目覚めたかのような印象を外界にあたえることは耐えられないと感じている当事者ダリットも少なくないと言う。

遺伝学的な見地からみたダリットは、「インドは、遺伝的には世界で最も多様な国家であるにもかかわらず、不可触民については遺伝的な根拠がまったくないのであり、この差別が社会的につくられてきたことは明らかである。遺伝的調査はさらに、全体として、インドの遺伝的グループはいかなる非・南アジアのグループとも大きな類似性を示していないことを示しており、不可触民をふくむ全インド人は、まぎれもなく、また、等しく南アジアの人びとである。」と。

カーストという単語はもともとポルトガル語で「血統」を表す語「カスタ」(casta) であり、ラテン語の「カストゥス」(castus)（純粋なもの、混ざってはならないもの。転じて純血）に起源をもつ。15 世紀にポルトガル人がインド現地の身分制度であるヴァルナとジャーティを同一視して「カースト」と呼んだ。そのため、「カースト」は歴史的に脈々と存在したというよりも、植民地時代後期の特に 20 世紀において「構築」または「捏造されたもの」ともいわれる。

植民地の支配層のイギリス人は、インド土着の制度が悪しき野蛮な慣習であるとあげつらうことで、文明化による植民地支配を正当化しようとした。ベテイユは「インド社会が確たる階層社会だという議論は、帝国支配の絶頂期に確立された」と指摘している、と。

インド伝統の制度であるヴァルナとジャーティの制度体系は流動的でもあり、固定的な不平等や構造というより、運用原則とでもいうべきもので、伝統制度にはたとえば異議申し立ての余地なども残されていた。ダークス、インデン、オハンロンらによれば「カースト制度」はむしろイギリス人の植民地支配の欲望によって創造されてきたものと主張しているという。

こういう説もあるのだから、私達の教養、常識と言うものさえ、西欧列強の都合によって刷り込まれていると言う見解もあり得るのであろうか。カースト制度は、イギリスの植民地支

配の中で、今の形まで推し進められているとの解釈もあり得るのであろう。

⑩　ガンジーとアンベードカルの対立

1）アンベードカルの場合

「1947 年にネルー初代内閣で、アンベードカルは法務大臣に就任し、自身の出身であるアウトカースト（ダリット）への差別は違法であるとの決議を国会で通しています。彼の最大の目標は平等憲法の制定であり、憲法草案委員会の議長になって、不眠不休でほとんど単独で草案を書き上げます。」　彼の執念というべきか、 1949 年、カーストの廃止を謳ったインド国憲法は採択された。

しかしながら憲法ができても民衆のしきたりは変わらず、カースト制度は依然としてインド社会を支配しており、アンベードカルは、アウトカースト（ダリット）の差別を無くすには、自分達がヒンズー教から改宗して出るしかないと考える。

インドの歴史においては、ヒンズー教の差別に対して、万人の平等を説いた仏教やシーク教があり、アンベードカルは仏教を選択し、法務大臣を辞任して仏教へ改宗を果たすのだが、1956 年 10 月 14 日、 この彼の呼びかけに答えて、数十万（50 万人とも言われる）の不可触民達が一緒に改宗を果たしている。この 2 ケ月後に、健康すぐれなかったアンベードカルはこの世を去るのだが、現在インドには 1 億の彼の追随者仏教徒がいると言う。

２）ガンジーの場合

これに対して、ガンジーはカスト制度は、差別主義と否定するよりも、ヒンドゥー教の考えに基づいてインドをイギリスから独立せしめ、インドの社会を作っていこうという考えに立ち、カースト制度自体を否定している訳ではありませんでした、と言う。

ガンジーは次のように公式に発言しているという。

ヒンズー社会が存続するとしたら，それはカースト制度のうえに成り立っているからである。自治独立の芽はカースト制の中にこそ求められるべきだ。異カーストの間で食事をともにせず，結婚しないからといってカースト制が悪いとはいえない。カーストを超えて結婚し，職業を選ぶのは，ヒンズー教徒にカーストの真髄である世襲的職業原理を放棄せよといっているのと同じだ。世襲的原理は永遠の原理だ。 ブラーミンがシュードラに変わり，シュードラがブラーミンに取って代わるようになれば社会的，政治的大混乱を生じる。カースト制は社会の自然な秩序である。

ここまで言っているかどうか、私には疑問もあるけれど、インドの伝統的な社会秩序を肯定するとこうなるのかもしれない。しかしこの考えは、身分制社会、カースト制度を、自然の

秩序、普遍永遠の秩序と考え、その不平等を容認するとも理解されるのではないだろうか。

人間が努力しても超える事の出来ない事、出自などを理由にする、職業選択の不自由、教育を受ける権利の差別などを、むしろ自然の秩序としており、現存する社会的立場の不平等を前提にしており、いわば不平等社会の進め、のようにも受け取る事ができそうな気がする。

東洋的美学とも言えようが、身分の上下を重んじ、年上、目上の人を重んじるのだろうが、不平等社会にどっぷりかもしれない。ガンジーは非暴力主義者として褒め称えられている訳であり、むしろ聖人の域と言う事で、私達は子供の頃から教えられてきていると思う。

この年齢になって私は、こういう考えの人を聖人として、いったい誰が得をするのだろうか？などと考えざるを得ない。それは宗主国側、イギリス側、カストの上位の人々、要は支配する側ではないだろうか？非暴力主義でいてくれる植民地住民、そうであれば、都合が良いのは宗主国側であろうか。

そういえばガンジーは、反イギリス、独立運動のエンジンでもあり、ブレーキであった場合も多い。西欧近代の哲学における称賛の裏側には、現実的政治力学が働いている事も、想定できたりして、とか。

⑪　日本の瑞穂の国、森友学園

アンベードカルなんて、60 歳になってから私は知る事ができて、衝撃だった。日本の、教育勅語を重んじる教育が復活しようとする今の日本、森友問題は、このガンジーとアンベードカルの主張の違いから、浮かび上がる恐ろしさを持っているのではないか？

努力しても変えられない、親子、兄弟、男女などの関係を理由にして、逆らう事の出来ない上下関係を是とする風が、私達東洋人の中に確かにあるのだが、それは人間の、私達日本人の、互いに本当の気持ち、考えを言って、互いに理解しあう風を痛める事もあるのではないか？諦めが先に立ち、それが日本人における進取の気性を削いでは、技術発展、イノベーションもなかなか望めない。

司法制度の中の、裁く者と裁かれる者の不平等関係、日本の司法制度は、裁く側の印象で、裁きの内容を左右できる裁判官の心証が物を言う世界だ。これでは裁く者、裁かれる者との間に真の平等関係は無いだろう。これをさらに強化、合法化する共謀罪を、今国会で通そうとしている安倍自公政権である。

これらは、アメリカと言う戦勝国側が、東洋の農村社会の秩序に根差した、身分制度を口実

にする、不平等社会の再定置になるのではないのか。上に立つ者達（公務員、司法当局、町会、地域の上役、家庭内の強者、教育する側（教師））などに、進んで従う人を作りあげ、社会を支配するための道具、というのか理屈、暗示になるのではないだろうか？

そうして皆に、「うん」と言わせて、自衛隊をアメリカの石油資源の確保や、異民族支配の為に使いまわし、事実上のアメリカの支配の下に、好きに道具として使い、置き続けるために。

人が好いばかりが能ではないので、しっかりしょう。私達東洋人は歴史に学び、自分達と子供達の命と生活を守るために、政府、アメリカの「下ごころ」と、その為の嘘の楼閣、人間の観念の作り出した幻のような事柄、「想像の共同体」のようなものを、自分なりに解釈し直していく事が大切な時代ではないだろうか。

次世代の、今苦労をしている子供達の生活が、これで良くできるのかどうか、この国を守っていくためにである。戦前復帰、不平等社会で苦しむのは誰なのか、そこに注目しながら、森友学園問題、共謀罪問題を、考えて行く事が大切ではないだろうか。

アジアの人々の、過去の長きに渡る不幸と幸の経過を読み説き、よく類推を働かせて、アメリカの悪魔のような戦略を暴いていこう。日本人の中の買収された言葉、それを隠したい「下ごころ」を。

台風・核戦争・テロ・インドの安倍総理夫妻　2017.09.17 Sunday

台風 18 号は、急速に大きくなり、日本直撃とか。その上北朝鮮のミサイル発射、襟裳沖に落下、8 月 29 日の(火星 12 号　襟裳岬着水・失敗)をやり直し、成功が怖い。

アジアでは「ノーベル平和賞だったアウン・サン・スー・チー国家顧問率いる政府とともにミャンマーを統治している軍指導部は、ロヒンギャ問題で民族浄化を行っていると非難されている。イスラム系少数民族ロヒンギャの村落で掃討作戦を展開し、数十万人のロヒンギャが隣国バングラデシュに逃れている。」これでアルカイダ報復があるとか。

イギリスでは、今年になって、22 人が犠牲になった中部マンチェスターの爆弾事件を含めて 4 件のテロ事件が発生。今回で 5 件目が 15 日午前 8 時すぎ（日本時間の 15 日午後 4 時すぎ)、車両の中に置かれていた不審物が突然爆発し、22 人がやけどなど。

そして今、日本の安倍自公政権を率いる安倍夫妻はインドへの外遊中。インドへは原発、新

幹線を輸出している。インドは原発大国。
これらのバラバラに見える時事問題の間を繋ぐものが、有りはしないのだろうか？

① 地震・かみなり・火事・おやじ
この 4 つが昔は怖いものの代表だった。ぜんぶバラバラに起こる。かみなりとおやじがならんで怖かった、のどかな時代。今地球は地殻変動の時代を迎えているのか、温暖化、熱帯のスコールのような雨が降り、福島の地震以降は各県、各地域で、地震が頻発のような気がする。

でも、もしも現代の科学技術で、局地的な雷雲、雪雲、海上では小さな台風など、人工的に作れたらどうだろうか？偏西風に乗せてしまえば、後はシミレーション可能かもしれない。何か、世界各地では政権への不満が鬱積する頃に、大きな地震、津波、台風、火事が直撃するような、データを集めたらどうなのか。自然現象、人為的現象、双方の可能性をにらみつつ。

② ミャンマー(旧ビルマ)で「イスラム系少数民族の浄化？」
ミャンマー軍がイスラム系少数民族ロヒンギャの村落で掃討作戦を展開し、数十万人のロヒンギャが隣国バングラデシュに逃れているとの報道。
　1 年前、アウン・サン・スー・チーさん圧勝を支えたのは国の 90%に及ぶ仏教徒。インド・バングラデッシュに隣接するこの地域では、イスラム教徒も多い。イギリスの植民地だったから、独立をめぐり、宗教対立がイギリスの植民地支配、政策運営に利用され、民族の葛藤が重なってきていると。

新政権、1 年目、もう宗教対立。民族浄化とは、インド独立と同様の轍を踏むのだろうか？アウン・サン・スー・チーさんの夫はイギリス人、若きアウン・サン・スー・チーさんを、英国諜報員(スパイ)が目的をもって、独立の父の二世、彼女に接近、結婚したと言う噂まで拡散されている。

隣国インドは、非暴力のガンジーを聖人にして、カーストと宗教対立を抱えて苦しむ社会。西欧人のアジア人支配には、国内の宗教対立と伝統文化（慣習）が悪用されるようだ。儒教文化、忖度文化、長幼の序の変形、二世、三世を重用して、国民を心理的に囲い込んで従わせる？この方も建国の父の 2 世、韓国の朴 槿恵さんと同じ。

今ミャンマー、かつてのビルマの竪琴の国は、インドの戦後の歴史のような、その不幸をなぞっている？インドでは故ネール首相の一族達は全員暗殺されている？

③ ムンバイ(旧ボンベイ)、コルカタ(旧カルカッタ)、チェンナイ(旧マドラス)へ
そのインドだが、2011 年 8 月 1 日に日本とインドの包括的経済連携協定（CEPA）が成立、発効後 1 年間（2011 年 8 月～2012 年 7 月） の貿易総額は約 1 兆 4,332 億円（前年同期比＋4.8%)。 近年、インドは我が国円借款の最大の受取国（2016 年度に供与決定した円借款の総額は約 3,713 億円)。

現政権、モディ政権は，2014 年 5 月の総選挙で歴史的大勝を収めて成立。発足から 2 年半以上が経過し，2019 年 5 月頃予定の次期総選挙まで折り返し点だと言う。

「黄金の四辺形」と言われる、首都デリー、商都ムンバイ(旧ボンベイ)、東部・南部の中核都市コルカタ(旧カルカッタ)、チェンナイ(旧マドラス)の 4 都市を結ぶ最新設備の高速道路も 2007 年春完成している。これらイギリス名の都市が、伝統的な名称に変わった事情について、「インドの歴史を『反英・反植民地』で全面的に見直そうとする大きな潮流の発端」との指摘がある。

④　 ヒンズー至上主義と新政権
民族義勇団（Rashtriya Swayamsevak Sangh、略称:RSS）は、インドのヒンドゥー至上主義団体で、1925 年医師のケーシャヴ・バリラーム・ヘードゲーワールらが創設した文化団体だという。

この 1925 年とは、第一次大戦 1918 年終結後、1929 年大恐慌の間、ナチスドイツの結党が 1919 年 1 月、指導者原理に基づく指導者（ドイツ語: Führer）アドルフ・ヒトラーのカリスマ的支配で政権獲得に動く、その頃である。

インドの RSS（民族義勇団）は、社会運動団体に留め、直接は政治活動を行わない建前になっていたが、2015 年の選挙で大勝利した現与党「インド人民党」の「創設メンバーの殆どは民族義勇団出身・関係者であり、同党の事実上の前身、或いは同党の私兵集団とも見られ、極右過激派、ファシスト視する批判もある。」と。ヒンズー教徒至上主義、他宗教は撲滅だという。宗教対立必至だろう。それがアメリカ CIA の狙いでもあろうか。

また RSS は、「ヒンドゥー至上主義者が反ムスリムの立場からシオニズムを支持していたことから、近年ではイスラエルと連携を深めている。」と。現インド首相のナレンドラ・モディ（2014-）は、元グジャラート州の首相で、「このメンバーの一人として有名である。」ウィキペディアより

現在、RSS は 250 万から 600 万人のメンバーを有するとみられている。普段の主な活動と

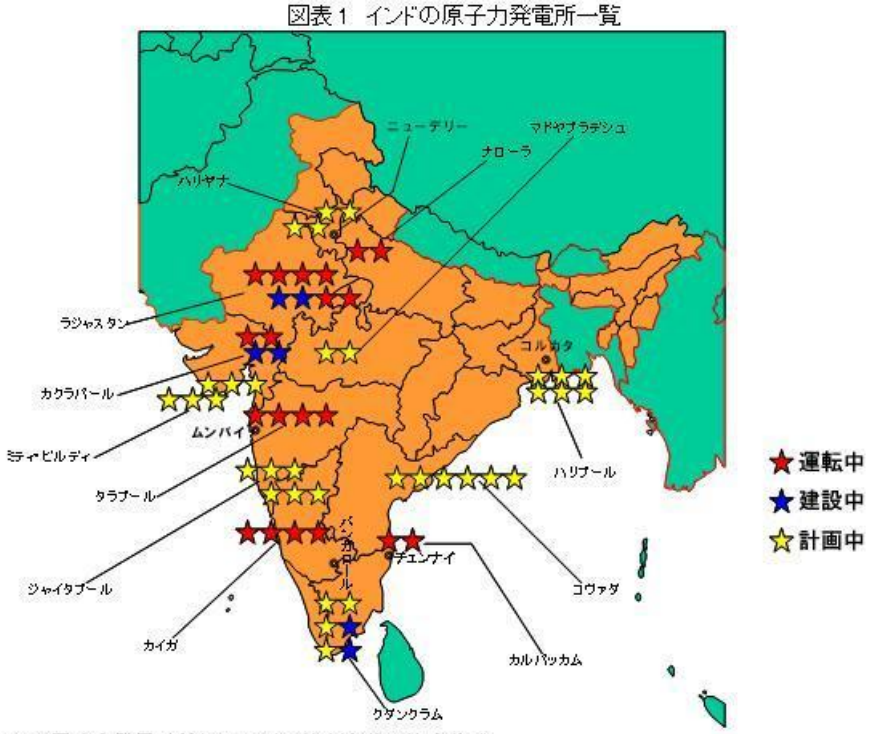
して、棒術の格闘技訓練を通じた青少年の心身鍛錬を各地方で行っている。

こうなると RSS は、インド版「日本会議」のようでもあり、今北爆危機が煽られ、大規模台風が襲う日本の首相が何故にインドに外遊なのか、その不思議が、氷解、謎は解けるのではないのか？

⑤　RSS の教科書改訂は、日本会議と同じ？

注目点が、インドは独立後、ミサイルや核関連技術の開発と平行して原子力発電所の整備計画に着手。1958 年に民生用原子力開発を推進するための原子力委員会（AEC）を設置し、69 年には初の原発（タラプール 1、2 号機、米 GE 製）の商業運転を開始している。しかし 74 年に強行した初の核実験によって諸外国からの原子力協力が打ち切られ、独自の技術開発を進めることとなる。80 年代以降も原発建設は着々と進み、現在では 20 基・総発電能力 478 万 kw の原発が稼動している（図表 1、2）。

図表 1　インドの原子力発電所一覧



資料）インド原子力発電公社(NPCIL)の資料を基に筆者作成

http://tajimaiclc.at.webry.info/201104/article_16.html　より

そして 21 世紀の今、インドには、世界史も、インド史も書き変えた教科書が、現モディ政権により配布されていると。

註 1）http://diamond.jp/articles/-/134435?page=2

インドのカースト制度はヒンズーの文化として、英国植民地支配の道具となり、英国軍隊に雇われる事ができる上級カーストも創られた程。差別される身分の人々の人数さえ今もって把握できない社会であり、最大で 80%との数字もある。職業も居住地域も、カーストにより指定される劣悪な条件を生きている人々に対して、国民の 3 割程の、上級カースト者のマンパワーで、 brics(ブリックス)入りしているとも言う。不可触民のヒンズーから仏教への改宗は引き続いている。

⑥ イギリスのテロ

北爆危機が騒がれ、アラート鳴り響く日本に来日、安倍総理とお茶会を楽しんで帰国した英国メイ首相に予定されていた日程は謎？　表には出ない任務があったのやもしれないとか？この人の国に安倍総理が原発輸出、1 兆円の援助付き、これは何を語っているのだろうか？

英国にアメリカ CIA の軛(くびき)原発を受け取る新首相、この人は小池百合子さん同様、女性に受ける人で、おしゃれで、哲学が欠如っぽい人か？今後 EU の統合に反対したサッチャー同様に、ヨーロッパ社会に紛争、アラブの戦争の推進国家として英国が機能するための人材であったことを、北朝鮮ミサイル発射危機さ中の、お茶会が語っていたりしない事を祈る。

そしてイギリスでは今年に入ってからテロが頻発、今回で 4 度目。これはイギリス国民を思考停止に誘う、捏造されたテロ、CIA の自作自演等もあり得るのかもしれない？政情不安定、テコ入れが必要ならば、チェルブノイリもあったのかもしれない？メイ首相への援護射撃、英国民の思考停止を誘う事ができそうだ？

⑦ 北朝鮮の核開発・電磁パルス攻撃（EMP）

そして日本では、連日の北朝鮮の核兵器がマスコミを覆っている。でも安倍総理は外遊中、これが北の核兵器騒ぎの裏側を語るのではないだろうか。アメリカ CIA 達(安倍総理達も)北の核攻撃をマスコミ煽らせて国民を思考停止に陥れつつ、自分達は着々と、世界中に原発を拡散する仕事を進めている。

何故原発と言う原子力発電の平和利用は、北の核戦争脅威より、重要課題となってしまうのか？それほどの重要事項なのか。それは原子力の平和利用（原発)も核実験も実はかぶっていて同じだから？原発がアメリカ CIA の最強の軛(くびき)かも？北朝鮮の核実験の方は、今か今かとポーズだけで、何だかのアメリカ側からの報酬を得ない限り、実行できない構造にある？

アメリカ CIA と北朝鮮は、齟齬を抱えつつある、雇い主と雇われ実行部隊なのかもしれない。そういう仮説をもって毎日のニュースを読み込む事も、有りではないだろうか？この頃マスコミは、電磁パルス攻撃（EMP）については語らない？インドで安倍総理はどう「日本会議」を励まされたのだろうか？

⑧ 日本会議の歪んだ日本文化は反対
インドの現政権の配布する教科書は非科学的に歴史捏造が激しいらしい。現政権、日本会議、稲田元防衛相の言う教育勅語の世界だろうか。嘘を担いで仲良し、嘘で騙して仲良しが、安倍自公政権、教育勅語の世界であろう。親にもならず、夫婦関係をも体験しない若い日本人世代が増えているのに。

生きる目的は仲良くする事がすべてではない、嘘で騙して仲良しには裏がある。本音での幸せが大切だろう。幸せは人それぞれ、自由に決める事だろう。国が決める形だけを押し付けられるのは不幸である。

公明党の御本尊様は、安倍自公政権が進むと、日本会議の国家神道に排斥される運命かもしれない？汚れ仕事の指示系統を文書化して、いざと言う時の切り札を確保しないと危ないのかも？小池さん達は、若狭さんの出自が語るように、最高裁事務総局が裏に居るような。でも駒として動くとしても、本命ではなく、その二軍的な感じかも？秘密結社だとか言われているようだ。

ここは宗教対立、イデオロギー対立は避けて、国民の生活、安堵が一番を軸にして、纏まる事ではないだろうか。回り道もあるので、左翼も、右翼も正義ばかりを振りかざさない事だ。回り道さえ閉ざしては困るのは国民だ。

⑨ CIA の軛(くびき)原発を廃止し、日本の真の独立を
私達は、無差別平等、宗教を問わず、イデオロギー対立せず、出自を問わず（親のコネ社会、二世、三世議員反対）国民を分断せず、融和政策ではないだろうか。

いざと言う時の為に、食料の自給率を高める方向で、耕作放棄地を再生して、地場野菜、養鶏、牧場などと。ポスト核戦争時代へ向けて、社会を組み直す政策、政権だろうか。何よりも CIA の軛（くびき）原発を止めないと奴隷状態から抜け出せない。

世界史的な転換点、マスコミのニュースにしかと注目だ。ここは生産工場の国内操業を目指しつつ、新しい社会保障のある、安全な食料を生産する農業立国。その方向で少しづつでも動く、嘘を言わない、正直な政府を立ち上げよう。その中に、日本の国が、こつこつと生き

延びる途が、産まれて来る時代なのではないのだろうか？